

第二章 トム、ベッキーに会う

次の日は晴れていました。

トムは、彼の特別な日曜日用の服を着ました。

トムはそれらが嫌いでした。

トムとシッドはいつも、日曜日の朝には日曜学校に行っていたのです。

トムは日曜学校が好きではなく、先生の言うことを決して聞きませんでした。

日曜学校の後、トムとシッドとポリーお婆さんは教会にいました。

この日曜日、トムは教会でいたずらをしたかと思われ、大きな黒いカブトムシをポケットに入れて持ってきました。

牧師が話し始めると、トムはポケットからカブトムシを取り出して、床に置きました。

教会の小犬がその大きなカブトムシを見て、それと遊びたがりしました。

しかし、カブトムシは小犬の鼻をかみました。

小犬がほえたので、教会にいた人々は皆、小犬を見ました。

牧師はとても驚きました。

犬はあちこち跳ね回り、黒いカブトムシの後を走って追いました。

犬は大きな物音を立てました。

皆、それがこっけいだと思いましたが、彼らは笑わないようにしました。

牧師は話し続けましたが、誰も彼の話聞いておらず、牧師は怒りました。

皆、犬とカブトムシに興味があったのです。

トムは満足でした。

月曜日の朝、トムは起き上がるのが嫌で、学校に行きたくありませんでした。

ポリーお婆さんはトムの部屋に行って、「トム、すぐに起きて、学校の準備をなさい！」と叫びました。

その朝、トムは彼の親友のハックルベリー・フィンに会って、彼らは一緒に歩きました。

ハックのお父さんは怠け者で働いておらず、ハックのお母さんは亡くなっていました。

ハックには家がありませんでした。

ハックは通りに住んでいたのです。

ハックは、学校にも教会にも行っていませんでした。

ハックの服は、古びて汚れていました。

ハックは自分のしたいことを自由にするのができたので、彼はいつも釣りに行ったり泳ぎに行ったりしました。

ハックは幸福な少年でした。

セント・ピーターズバーグのお母さんたちはハックが好きではありませんでした、というのも彼はしょっちゅう悪い言葉を使っていたし、誰の言うことも聞かなかったからです。

しかし、町の子供たちはハックのことが大好きでした。

彼らは、ハックみたいに自由でありたいと思いました。

「こんにちは、ハック！」とトムは言いました。

「その袋の中に何を持っているんだい？」

「死んだネコさ」とハックは言いました。

「死んだネコで、君は何をするつもりなんだい？」とトムは尋ねました。
「真夜中すぎに、それを墓場に持って行きたいんだ」とハックは言いました。
「死んだネコは、墓から幽霊を呼ぶことができるのさ」
「え、本当に？」と驚いたトムは尋ねました。
「それは本当なの？」
「うん、年老いたホプキンスさんが俺に教えてくれたんだ」とハックは言いました。
「ホプキンスさんはこれらのことについて知っているんだ、だってあの人は魔女だからね」
「僕、君と一緒にいってもいいかな？」とトムは尋ねました。
「もちろん」とハックは言いました。
「でも、お前、幽霊が怖いんじゃないの？」
「幽霊が怖いだって！ もちろん怖くないよ！」とトムは言いました。
「今夜の11時に窓のところに来て、僕を呼んでよ」
トムは、セント・ピーターズバーグにある、教室が一つだけの小さな学校に行きました。
その朝、トムは遅れてそこに行き、先生は怒りました。
「トーマス・ソーヤー！」と先生は言いました。
「どうして君はまた遅刻なんだね？」
トムが教室を見回すと、新しい少女が見えました。
彼女は長いブロンドの髪の毛に、青い目をしていました。
彼女はとてもかわいらしかったので、トムは彼女を気に入りました。
彼女の隣には空いている椅子があって、トムはそこに座りたいと思いました。
でも、どうやって？
トムは素早く考えて、「僕、通りでハックルベリー・フィンに会ってさ、彼と話を
するために立ち止まったんだよ」と言いました。
先生はとても怒り、「あのひどい少年と話をしてはいけないということは分かっ
ているね！ さあ、行って女の子たちとお座りなさい！」と言いました。
子供たちは皆、トムを笑いました。
トムはその新しい少女の隣に座って、彼女を見ました。
トムはうれしくて、家の絵を描きました。
「あなたの絵を私に見せて」と彼女はささやきました。
トムは彼女に絵を見せました。
「それ、すてきね」と彼女は言いました。
「今度は人を描いてよ」
トムは家の近くに人を描きました。
それは下手な絵でしたが、少女はそれが気に入りました。
「あなたって絵がうまいのね」と少女はほほ笑みながら言いました。
「私は描けないもの」
トムはうれしくなり、「僕、学校の後で君に教えてあげられるよ」と言いました。
「あら、ありがとう、トム！」と彼女は言いました。
「君の名前はなんて言うの？」とトムは尋ねました。
「ベッキー・サッチャーよ」と彼女は言いました。
「私、あなたの名前を知っているわ。トム・ソーヤーね」
その夜、トムとシッドは9時半にベッドにいました。

シッドはすぐに眠ってしまいましたが、トムは眠っていませんでした。
トムはハックを待っていたのです。
11時に、トムはハックが外にいるのが聞こえて、ベッドから外に出ました。
トムは着替えて、寝室の窓から素早く外に出ました。
「行こう！」と、ハックは死んだネコの入った袋を持ちながら、ささやきました。
トムとハックは、丘の上にある墓地へと歩いて行きました。
墓地は木やお墓のたくさんある、暗くて怖い場所でした。
風が奇妙な音を立てて、暗い雲が月を覆いました。
「幽霊が物音を立てているのかな？」とトムは考えました。
トムは怖かったのですが、何も言いませんでした。
「ホス・ウィリアムスのお墓を見つけよう」とハックは、辺りを見回しながら言いました。
彼らが墓地の周りを歩くと、間もなくホス・ウィリアムスのお墓を見つけました。
「ふむ、ここだね」とハックは言いました。
「彼は先週死んだんだ」
「彼は僕らの声を聞けると思う？」とおびえたトムは尋ねました。
「彼の幽霊は俺たちの声を聞けると思うよ」とハックは言いました。
「じゃあ、彼をウィリアムスさんと呼ぼうよ」とトムは言いました。
「分かった」とハックは言いました。
「でもね、みんなは彼をホスと呼んでいたよ」
「しーっ！」とトムは、ささやきました。
トムの心臓は速く鼓動しており、トムは寒くなりました。
「何だ？」とハックは尋ねました。
「君にはあの物音が聞こえる？」とトムは尋ねました。
「あっちを見てよ、ハック。ああ、何てこった！」